

# マアジの新規加入量調査

(資源評価調査)

寺門弘悦・村山達朗

## 1. 研究目的

本県のまき網漁業や定置網漁業の主要漁獲対象種であるマアジの新規加入状況を早期に把握するため関係機関と共同で中層トロール網による調査を実施し、日本海南西海域へのマアジ幼魚の新規加入量の推定を行う。また、得られたデータはマアジ対馬暖流系群の資源評価における新規加入量の指標値とする。

## 2. 研究方法

関係機関（日本海区水産研究所、西海区水産研究所、鳥取県水産試験場）との中層トロール一斉調査を平成 20 年 6 月前半に実施し、その結果を基に新規加入量の推定を行った。また、マアジ幼魚の来遊盛期を検討するため、当センターでは一斉調査に加えて 7 月まで調査を実施した。

6 月調査では島根県西部沖から山口県沖に 3 本、7 月調査では福岡県沖の 2 本を加えて計 5 本の調査ラインを設定し、各ライン上につき 3 定点において中層トロール網を曳網しマアジ幼魚の採集を行った。調査は 6 月に 2 回（前半：6/2、6/4-6/5 後半：6/17-6/18）、7 月に 1 回（7/1-7/3）の計 3 回実施した。中層トロール網の曳網水深は 20～50m とし、曳網速度は 3 ノット、曳網時間は 30 分間とした。

6 月前半の調査から得られた結果について関係機関と共同で調査結果を分析し、マアジの加入量指数を算出した。

## 3. 研究結果

一斉調査の結果から算出した加入量指数（加入量の多かった 2003 年を 1 とする）は 1.19 となり、2003 年の調査開始以来最高の値となった。図 1 に境港におけるまき網 1 ヶ統あたりの 0 歳魚漁獲尾数と加入量指数の関係

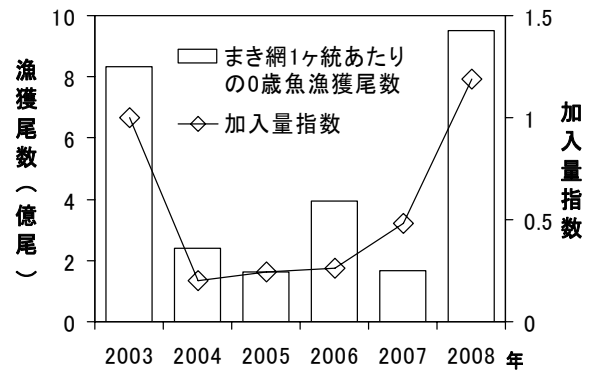


図 1 境港におけるまき網 1 ヶ統あたりのマアジ 0 歳魚漁獲尾数と加入量指数との関係

を示した。同図に示すように本調査で得られた加入量指数が高ければ、山陰沖でマアジの当歳魚が多く漁獲される。これより、2008 年級の山陰海域への新規加入量は近年では高い水準にあったと推定された。

採集時期別のマアジ幼魚の採集密度（1 曳網当り採集尾数）は、島根県西部沖から山口県沖においては 6 月前半 595 尾、6 月後半 99 尾、7 月 144 尾となり来遊盛期は 6 月前半であったと推定された。2005～2008 年の調査結果から山陰沖へのマアジ幼魚の来遊盛期は 6 月～7 月前半の範囲にあり、年によって来遊盛期は若干異なるものの、6 月に実施している現行の一斉調査から得られる加入量指数は、山陰沖へのマアジ当歳魚の来遊状況を良く表しており、現行の調査時期でも概ね問題はないと考えられる。

## 4. 研究成果

本調査結果は、トビウオ通信平成 20 年度第 6 号に報告した。また、研究結果はマアジ対馬暖流系群の資源評価を行ううえでの資源量指数の一つに採用され、ABC（生物学的許容漁獲量）をもとにマアジの TAC（漁獲可能量）が設定された。